

月刊
まちめん

まちめん

まちめん

まちめん

あ

ち

生

む

の



▲楠瀬大枝他編『土佐国職人絵歌合』

藤並の森

高知県立文学館

高知県立文学館ニュース

集いの文学

リレー随筆

集いの文学

竹本義明

私はいま62歳だが、学生時代には高知大学の吉野忠教授のお宅などで『伊勢物語』『古今和歌集』『源氏物語』などの影印本を使って輪読会をしていた。

就職後は県立図書館で内田八郎氏を中心にして『桜根家集』『山斎集』『秦里詩稿』なども読んだ。現在、

文学館の助成を受けて「近世土佐文学研究会」を毎週やっている。

さて、昔もこのような研究会が行われていたのか考えてすぐ思い出すのは、17世紀の野中兼山らの朱子学研究である。彼らの研究方針の一つは『論語』述而篇の「述べて作らず。信じて古を好む」とであつた。「自分（孔子）は在つたことを述べているのであつて、新たに創り出しているのではない。それは古を信じ古を好むからだ」という意味である。

谷秦山は兼山社中の秀才山崎闇齋の弟子であつたが、秦山学派の方針も「述べて作らず」で、「土佐国式社考」「土佐国蠹簡集」「同拾遺」などを編集し、以後「土佐国編年紀事略」「南路志」「土佐国群書類従」と大部の資料集を生み出した。

他のグループでも『古事記伝』『日本外史』などの輪読会をしていたが、漢詩・和歌・俳諧などの創作においても共同研究や合作が行われた。

漢詩では教授館学頭・日根野鏡水らの漱玉吟社が自分達の漢詩集『漱玉吟社絶句』（文学館蔵）を行った。身分の上下を問わぬ雅遊であった。

武士や商人など、上下の者が月並・当坐の歌会を催し、歌合を楽しみ、和文の会もやつた。特筆すべきは国学者・有職故実家・絵師らが共同して『土佐国職人絵歌合』（文学館蔵）を作ったことである。土佐の歴史・民俗・産物などを徹底して研究し、それを歌合に仕上げたものである。

俳諧は土佐国内西も東も美濃派一色であったが、盛んに指導し交流し、百韻・五十韻・歌仙などの連句を楽しんだ。2月1日（火）から、文学館で収蔵資料展が開催されるが、そこでは文学館蔵の俳諧『蓮の上の露』などを展示する予定である。

更に漢詩と絵画の合作も盛んで、楠瀬大枝が島本蘭溪の還暦祝賀のために描いた桜と松に鏡水が贊を入れた掛け軸も展示するという。

最後に、吉田正準・孝繼父子が編集した『採玉集』初篇・後篇は近世土佐の歌人たち283名の7200首余りの歌を収録したものが、編集作業の話を聞いてたくさんの歌人達の協力があつたという。これも「集いの文学」の一つに数えられるであろう。収蔵資料展で御覧いただきたい。

（近世土佐文学研究会講師）

Vol.52

展覽會紹介
Exhibition

収蔵資料展 高知・再考

高知県立文学館には、作家やご遺族、関係者の方から寄贈いただいた、貴重な資料がたくさんあります。今年の「収蔵

資料展」は、寺田寅彦、小砂丘忠義、宮地佐一郎、市原麟一郎といつたさまざまなジャンルの方々の業績を、新しい切り口でご紹介したいと思います。テーマは「高知・再考」。つどう、とびだす、かたるといった視点からの三部構成となっています。2月から新たな装いを凝らして出発する常設展示と共に、高知県の宝でもある貴重な資料の数々を、ぜひ「堪能ください。

▲長谷川零余子宛寺田寅彦書簡
全集未収録（大正10年7月31日）

I つどう

このコーナーでは、近世文人と、田中貢太郎の「博浪沙」のグループに注目しました。文人や作家たちが結集することで生み出されるパワーと、作り出された作品をご紹介します。

近世土佐の文人たちの作品を読むと、当時の人々の喜怒哀楽が生き生きと甦り、とても身近に感じられます。今回紹介する資料の一つに、楠瀬大枝他編『土佐国職人絵歌合』（慶応3年1867年奥書き）があります。歌合とは右と左の二手に分かれて歌を詠み、優劣を判定するものです。



平成23年
2月1日(火)
▼
3月27日(日)
企画展示室
観覧料350円

II とびだす

鎌倉末期の『東北院職人歌合』などに倣い、農業を除いたさまざまな職人の故事来歴が書かれており、それに付けられた色鮮やかな職人たちの絵が庶民の生活を描写しています。風俗・歌・画が一体となつた絵巻をぜひご覧ください。

近代においても、いい作品を作り出して

いこうという気概の元に作家たちが集いました。その一つとして、高知県出身作家・田中貢太郎と同人誌「博浪沙」が挙げられます。文芸春秋社の創始者であり、小説『眞珠夫人』等で知られた当時の大家・菊池寛に対する反発の気持も込めて刊行された「博浪沙」は、田中貢太郎を中心としたグループによって創刊されました。参加したのは尾崎士郎、井伏鱒二、浜本浩、田岡典夫

など、鉢々たるメンバーです。今回は、初公開となる尾崎士郎書・井伏鱒二画「われ貧窮に處す……」や、高知県出身の大衆作家・

高知出身の作家たちの中には、既存の枠から飛び出して活躍した人々も多くいます。この中から、寺田寅彦と小砂丘忠義を中心に、それぞれが見据えた新しい世界とは何かを探ります。

物理学者であり、随筆家である寺田寅彦。

今回は、師や友人等との交流の中で文学を

楽しんだ姿や、科学的視点で文学を捉え

たことに注目します。全集にも未収録の

「ホトトギス」編集者・長谷川零余子宛の寅彦書簡や、寅彦が師・夏目漱石と交わした書簡、漱石との交流にゆかりの深い花椿を寅彦が描いた貴重な油絵（寄託資料）を展示しますので、お見逃しなく。ちなみに、寅彦の椿の実験に関する論文等が、常設展「寺田寅彦記念室」でご覧になります。今なら椿の実験も体験できますので、挑戦してみてください。

また、生活綴方の指導者として知られ、全国的な支持を受けた教育者・小砂丘忠義も、教育の新しい地平に飛び出したと言えるでしょう。絶筆となつた原稿「病問録」や、旭尋常高等小学校の教員時代に書いた原

会
覧
展
紹
介
Exhibition

収藏資料展 高知・再考



平成23年

2月 1日(火)

▼
3月27日(日)
企画展示室

観覧料350円

☆展示解説

展覧会担当者による
展示解説を行います。

毎週土曜日と、

2月 6日(日)、

13日(日)、

3月20日(日)、

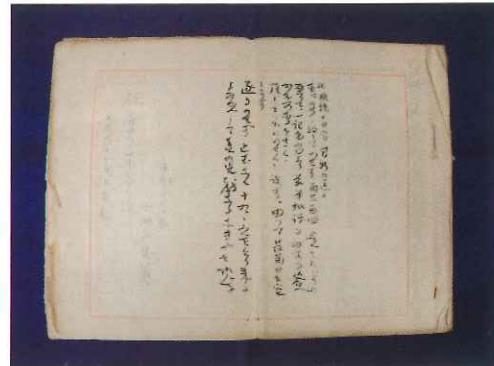
21日(月・祝)、

27日(日)

各日とも午後1時半～
(約30分)参加には**当日観覧券**
が必要です。

高知は、さまざまな人々によつて語られ
てきました。こうした語りを比較すると、

III かたる



▲小砂丘忠義「教育界の革命の後に」草稿

「高知・再考」をテーマとした収藏資料展。
見終わつた後に、「高知・最高!」と思つて
いただけるような展示に挑戦したいと
思つています。どうぞ、ご期待ください。

(学芸課／永橋禎子)

さらに、高知県出身の作家・宮地佐一郎、
土佐文雄、詩人・大江満雄など、故郷を語つ
た作家・研究者たちの資料・文章を紹介
します。宮地佐一郎「高知県人」原稿や、
坂本龍馬に関する研究の草稿「坂本龍馬
全集 坂本龍馬年譜」をはじめ、故郷への思
いを感じさせる資料をぜひご覧ください。

稿「教育界の改革の後に」などの資料を
通して、何よりも子どもの自由な可能性を
を感じ、それを育むことに情熱を傾けた
小砂丘の教育をご紹介します。小砂丘の
熱い思いを感じてください。

おどけ者やユーモラスな妖怪たちが大
活躍する土佐の国の民話。人々に愛され
てきたお話を長年収集されてきた、土佐
民話の第一人者・市原麟一郎さんの民話
取材メモなどを展示します。

集めてみました。

高知の多面性や共通点が見えてきます。
このコーナーでは、高知を語った「語り」を

◆関連企画のご案内◆

■記念講演会「小砂丘忠義の人間論・教育論」

太郎良信先生(文教大学教育学部教授)による、高知の教育家・小砂丘忠義に関する
記念講演会です。

日 時：平成23年3月13日(日) 午後2時～3時30分

場 所：高知県立文学館1Fホール 定 員：100名

参 加：要当日観覧券 申 込：電話または文学館受付にて事前申込

■映画上映会

高知県出身の作家原作の映画、高知を舞台にした映画を上映します。

◆「権九郎旅日記」…平成23年2月20日(日)

田岡典夫原作／志村敏夫監督／1953年／新東宝
89分・モノクロ／出演：森繁久彌ほか

◆「足摺岬」…平成23年2月27日(日)

田宮虎彦原作／吉村公三郎監督／1954年／近代映画協会
107分・モノクロ／出演：木村功ほか

◆「人間の骨」…平成23年3月6日(日)

土佐文雄原作／木之下晃明監督／1978年／120分・モノクロ
「人間の骨」映画プロダクション／出演：佐藤仁哉ほか

※各日とも

時 間：午後2時～
定 員：先着50名(全席自由席)
場 所：高知県立文学館1Fホール
参加料：要当日観覧券

※電話または文学館受付にて事前
申込。

■紙芝居と落語がはじまるよ！

土佐民話の第一人者・市原麟一郎さんによる紙芝居と落語をお楽しみいただけます。

日 時：平成23年2月11日(金・祝) 午後2時～

場 所：高知県立文学館1Fホール 定 員：80名

参 加：無料 申 込：電話または文学館受付にて事前申込

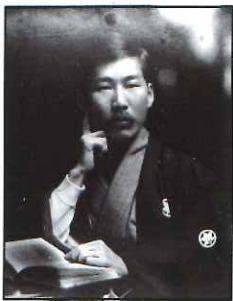
その他、朗読の会、民話の里めぐりなどを催します。詳細は文学館までお問い合わせください。

2月1日(火)から、

常設展が装いを新たにスタートします!



▲田中貢太郎



▲幸徳秋水



▲タカクラ・テル



▲小山いと子



▲以前の常設展のようす。2月1日から新たな装いでスタートします。

当館では、常設展で高知ゆかりの作家40数名を取り上げていますが、平成19年からは、定期的にローテーションで入れ替えを行い、数名の作家について文学、人、郷土との関わりを詳しく紹介しています。

来年度は、9名の作家を取り上げます。

古典では、紀貫之と今村楽。自由民権運動では、没後120年の中江兆民と没後100年の幸徳秋水。反骨の大衆文学では、馬場孤蝶と没後70年の田中貢太郎。現代文学では、生誕120年のタカクラ・テルと生誕110年の小山いと子。詩歌では、没後50年の若尾瀧水を中心にお紹介いたします。また、現在活躍中の作家も、新しく紹介したいと考えています。

適切な文字の大きさや肩の凝らない展示を心がけ、楽しく文学鑑賞をしていただければと願っています。加えて、常設展示室内の内装や館内の案内表示等にも工夫をこらし、お客様に少しでも快適に観ていただけるよう取り組んでいるところです。(学芸課／津田加須子)

館長室から

「山の向こうの美術館」訪問記

元吉 喜志男

昨年の秋、来年度の当館での展覧会開催に向けての打ち合わせで「富弘美術館」を訪れた。

早朝の浅草駅、東武線特急りょうもう号のシートで「富弘美術館」に思いを馳せていた。開館以来の入館者は600万人超、「花の詩画展」は北海道から沖縄まで全国各地で開催され海外からの要請もある。星野富弘さんのルーツの地へ。列車は都心を離れ北関東の景色へ、相模駅で、わたらせ渓谷鐵道に乗換え、車窓からの美しい山並みと渓谷美が目的地への近づきを感じさせてくれる。神戸駅で下車して乗合バスに、そして、やつと秋色に染まった山々の自然と草木湖のコントラストの中で息づいている美術館に到着。今年で20周年を迎えた富弘美術館、2005年4月に開館した新館が迎えてくれる。その館内に入ると素敵なお配りの発見の連続に新鮮な感動を覚える。展示作品の保存への配慮と、作品と観覧者の最も良い関係を作れる「場」をコンセプトとした空気環境や照明、廊下のない複数の円形の部屋が導く柔らかな動線、内部から屋外の花々が楽しめるよう壁にほどこされた円形の小さな窓、トイレの表示一つにも苦しかった頃の体験をもユーモアの心に変えた工夫がほどこされている心配りの奥行き。さすが、世界54カ国から集まつた1211件の設計案の中から選ばれ、富弘さんの感性が加わった館である。作品鑑賞の余韻を楽しむカフェからは、湖畔と山々が織りなす美しい季節のパノラマ、ガラスにはめ込まれた木の葉の飾りなども心憎い。館の心臓部とも言うべき資料室も資料の劣化や危機管理に対する様々な細やかな配慮はもとより、そこで作業する人々の環境などへの心配りも随所に感じられる。館で働くスタッフの方々の明るい表情も印象的。

人々に「愛」と「やしさ」と「生きる喜び」を与えて続けている富弘作品。心に深く残る贅沢な時間となつた。

★常設展企画コーナー【生誕百年 田宮虎彦展】への誘い

常設展の企画コーナーでの催しとして「生誕百年 田宮虎彦展」を開催します。

2011年8月5日、作家田宮虎彦は、生誕100年を迎えます。

文学館では、この記念の年に2月1日から、田宮虎彦の「人と文学」を常設展企画コーナーでご紹介します。

1911年8月5日、東京で生まれた虎彦は、父の仕事の関係で、高知・神戸などに移り住みながら神戸一中、三高、東京帝大国文科を卒業。同人誌『日暦』『人文文庫』に参加し、新聞社、女学校、拓務省拓北局、雑誌社などに勤務しながら、作品を書き続けました。

戦後『霧の中』や『落城』など「黒管もの」と呼ばれる歴史小説の連作で注目を集め、高く評価されるとともに『繪本』(芥川賞候補作品、毎日出版文化賞受賞)『菊坂』『足摺岬』など格調高い自伝的作品でも知られています。1956年には『田宮虎彦作品集』全6巻を刊行。1988年、脳梗塞に倒れ、4月9日、自宅で死去しています。

2010年4月、『寛永主従記』(1952年「社会タイムス」掲載)が、明治書院から発行され、注目を浴びました。この作品は、運命を甘んじて受け入れながらも、信念を貫き生きぬく主人公の姿が、作家の生き様とも重なり、読者に深い感動を与えており、今回は、この作品を中心にご紹介したいと考えています。

かつて、『繪本』が芥川賞候補作品として上げられた時、選考委員(瀧井孝作、石川達三、丹羽文雄、宇野浩二)は、「芥川賞を越えた作家」と評し、賞を見送りました。同時に、虎彦の歴史小説を大変評価しました。虎彦の歴史小説のリアリティは、歴史のそのままを描こうとした森鷗外の史伝を彷彿とさせつつ、小説世界を見事に構築しています。大岡昇平、三島由紀夫、服部之総(歴史学者)といった人々も虎彦の歴史小説を評価しています。

2008年には、『落城』『赤い椿の花』などを中心に紹介しましたが、生誕100年という区切りの今年、再度、田宮文学の新たな魅力に迫ります。是非、ご覧ください。

(学芸課／津田加須子)



▲左より虎彦の叔父・山本大(高知大名誉教授)、虎彦の母・鹿衛、田宮虎彦



▲『寛永主従記』
(1952年「社会タイムス」掲載)
2010年4月 明治書院

●高橋正氏、高知県 文化環境功労者に選定！

平成22年11月19日(金)、近代文学研究者の高橋正氏が第15回高知県文化環境功労者に選定されました。

高知県では、文化芸術の振興及び環境の保全、県民生活の向上等に功績のあった個人や団体を対象として、毎年、高知県文化環境功労者表彰が行われています。

平成22年度受賞者の表彰式は、11月19日(金)に高知県庁で行われました。

高橋正氏は、「文化芸術の振興」に力を尽くされており、平成13年からは、高知県立文学館運営協議会会長、平成20年からは、板垣会理事等も務められています。

また、多年にわたり、近代文学の研究に取り組まれ『評伝 大町桂月』など、多くの論文や著書を出版。近代文学の普及にも尽力されています。多くの文芸・文学団体の代表、役員の他にも、県内の文芸・文学賞の選考委員を務められ、昨年度は石川啄木の父、一禪の終焉地である高知駅前の歌碑建立に尽力するなど、高知県における文化芸術の振興に寄与された業績が評価されたものです。

近代文学の研究者が表彰されたのは、初めてであり、大変喜ばしいことです。

(学芸課／津田加須子)



トピックス

田岡典夫の「野中兼山」—舟入川沿いの兼山終焉地碑— 猪野 瞳

田岡典夫の晩年の大作「野中兼山」上中下が完結出版されたのは20年ほど前だった。「下巻の筆をとるにあたって私の心をふるいおこしてくれるものいろいろあるが」と、中巻のあとがきにあるように力をこめた土佐ものだつた。

野中兼山は新田開発、港湾建設などの土木事業に腕をふるい藩制確立に大きな功績を残したが失脚、土佐山田町中野に隠居、そこで寛文3年12月15日、49歳で没した。田岡典夫はこの作品のなかで、兼山は肝硬変による吐血死と推測しているが、その兼山と一族への藩による苛酷な仕打ちの無念と功績とともにかきあげた。

中野には野中兼山先生終焉之地の碑がたち、その脇には町教育委員の「野中兼山別邸跡」という解説があり、「兼山が山田堰を築き、香長平野を拓き、

◀ 時光石宮



◆野中兼山先生終焉之地の碑

中野には野中兼山先生終焉之地の碑がたち、その脇には町教育委員の「野中兼山別邸跡」という解説があり、「兼山が山田堰を築き、香長平野を拓き、

(詩人)

新しい町をつくる根拠地とした」とある。舟入川開発の奉行所の陣所でもあった。そこに隠居、届原の「離騒」などを読んで日を送った。当時の井戸もある。

そのまま近くの中野公民館前には祭神野中

兼山先生のお宮が時光石宮としてたつていて。地元でトツコイシと呼んできたもので、兼山は舟入川工事にたずさわる者たちに時を知らせる日時計を用いた。この時光石で時間を測り、ほら貝で時間を知らせたことから語りつがれてきた。お宮には玉垣がめぐらされ、その石柱に高知市時計組合、山田町時計商組合、発起人、世話人、時計店の奉獻者が刻みこまれている。昭和51年6月10日建立とあり、時の記念日に建立された。

ここは吉井勇の猪野々への文学散歩コースにもくり入れられめぐつたことがあつた。山田堰から流れこむ舟入川は洪積層と沖積層の段差に沿つて後免へ流れ、そこから大津をへて高知市へ流れこむ。舟入川前方には開発した水田が太平洋まで拡っているが、それを見ながらの隠居の日々であつたのかとしのばれる場所だつた。

兼山開発の舟入川は高さ1間、広さ6間というから2メートルの堤防、20メートル幅の水路だつた。藩政期から戦後しばらくまで、ほぼ2世紀近く、ここを筏が流れ、木炭や米などの物資が、とともに平田舟で運ばれていた。いまは幅4メートルのコンクリート水路で昔の面影はない。

町内には野中姫と古檜家が建てたお嬢堂と呼ばれる野中詞堂があり、その境内には高知の歌人たちの歌碑が建つていて。先日たずねたときには地元の人が清掃しており、青年たちがキヤツチボールをしていた。

資料受贈報告

—最近の寄贈資料から—

『宮尾登美子さん関連資料

写真・書籍・雑誌・草稿・書簡他



▼宮尾登美子「写真約1485枚　書籍約30冊　0冊　雑誌約700冊　草稿15点　書簡7点」他

▼竹崎邦博・寺田寅彦写真　熊本第五高等学校在学時「複写」他　▼大連日僑学校同窓会・清岡卓行関係資料　イスクラ(火花) 第1~7号　大連日僑同窓会編刊」他　▼細川光洋・短歌研究67巻元でトツコイシと呼んできたもので、兼山は舟入川工事にたずさわる者たちに時を知らせる日時計を用いた。この時光石で時間を測り、ほら貝で時間を知らせたことから語りつがれてきた。お宮には玉垣がめぐらされ、その石柱に高知市時計組合、山田町時計商組合、発起人、世話人、時計店の奉獻者が刻みこまれている。昭和51年6月10日建立とあり、時の記念日に建立された。

ここは吉井勇の猪野々への文学散歩コースにもくり入れられめぐつたことがあつた。山田堰から流れこむ舟入川は洪積層と沖積層の段差に沿つて後免へ流れ、そこから大津をへて高知市へ流れこむ。舟入川前方には開発した水田が太平洋まで拡っているが、それを見ながらの隠居の日々であつたのかとしのばれる場所だつた。

平成21年秋、次いで22年春と、当館では、作家宮尾登美子さんから貴重な資料をご寄贈いただき、このたび大まかな整理を終えました。

今回頂いた資料で群を抜いて多いのが、1万枚を超える写真資料。上京前、高知での保母、社会福祉協議会職員として奮闘された日々。上京後、作家を志しながらの会社勤め。文筆一本に専念され、直木賞、吉川英治文学賞、菊池寛賞他、数々の受賞式に臨まれた晴れの瞬間。全国各地での講演会や展覧会、各界著名人との1枚。写真は

一方、国内外の取材先で撮影された資料写真の多さにも驚かされます。小説の舞台であるギリシャやエジプトの遺跡、新潟の蔵元等が収められています。今回の受贈資料のうち、写真に次ぐ点数を誇る蔵書もまた、大部分は小説を書くにあたつて収集されたもの。歴史を中心に広範な分野に渡る文献には、貞の角が折り曲げられ、カラーペンで傍線が引かれたものも散見されます。宮尾さんは、徹底した調査に基づいて書くことで知られていますが、これらの資料群は、その一端をうかがわせます。

(学芸課／小松路代)

受贈報告（平成22年11月～12月）敬称略

このほか、全国の個人・関係機関の方々から図録など数多くの資料をご寄贈いただきました。厚くお礼を申し上げます。

松谷みよ子展を開催しました！

当館にて記念講演会を開催！

平成22年11月16日～平成23年1月10日まで開催の「松谷みよ子の世界展」は、童話・民話・小説・エッセイなどの多岐にわたるジャンルで作品を発表してきた作家・松谷さんとのこれまでの歩みと幅広い作品世界全体を捉えることのできる展覧会として好評をいただきました。

11月28日㈯は、松谷みよ子さんを高知にお招きして記念講演会「土佐ひわたし」を開催、定員を大きく超える147名が聴講しました。講演で松谷さんは、まず、母方の祖父が高知県出身という高知とのゆかりに触れられ、祖父のこと、父母のこと、「自分の前半生などを話された後、高知県が舞台の自作『海辺のずんだ鬼』を朗読くださいました。



▲講演で、土佐への思いや若い頃の思い出などを話す松谷さん。



朗読後は、松谷さんと長年の交流がある土佐民話の第一人者・市原麟一郎さんから松谷さんの知られていない一面の紹介がありました。「かごひこ」「十七ちゃん」のモーテルとなつた松谷さんの長女・たくみさんと一緒に会場からの質問に答えていただきました。

会場を埋めつくす参加者からどんどん飛び出す質問に、松谷さんは時にコーモアを交えてお話しされ、笑顔のあるれるないうかな講演会となりました。

この他にも関連企画として、松谷さんの愛した土佐民話を語りや紙芝居で楽しむ会(12月11日)や、松谷さんの代表作の一つである『龍の子太郎』を朗読劇で楽しむイベント(1月8日)を開催。朗読劇は、テレビのナレーションなどでおなじみの堀井真吾さんが主宰し、プロの俳優・声優が多く所属する「物語シアター」のみなさんが出演。おまかせ形で松谷さんの文学に親しみいただきました。

(学芸課／間城彩佳)



テンポよくコマツカルで巧みな心理、情景描写のハードボイルドに恋愛小説の味付けもされたartnerainmentな作品。1992年版「いの」アーティーがすくいー」で第1位を獲得し、刊行当初から映画化を待望されていました。

かつて、映画の感動を本からも味わってみませんか？

(事業課／岡崎由美子)

ヨーロピアンショップより

当館のヨーロピアンショップでは、常設展で紹介している作家を中心とした書籍を多数取り扱っています。中でも、今、話題となっているのは、有川浩さんと志水辰夫さん。

この二人、実は、昨年秋から今年にかけてドラマ化、映画化された作品の原作者なのです。

有川浩さんは、昨年秋連続ドラマ化で話題をよんだ「フリーター、家を買う」と、今年の春に中谷美紀主演で公開予定の「阪急電車」。宝塚駅から今津駅までを結ぶ片道93分の阪急今津線を舞台に、偶然乗り合わせた全く繋がらのない人々が繰り広げる心温まるヒューマンドラマ。

そして、志水辰夫さんは昨年11月より仲村トオル主演で公開中の「行きすりの街」(高知では1月8日)より上映)。

※常設展示室の入替のため、1月11日(火)～1月31日(月)は**臨時休館**とさせていただきます。

企画展 案内

収蔵資料展

平成23年 2月1日(火)～3月27日(日) 会期中無休

会場：高知県立文学館2F 企画展示室

観覧料：350円（常設展含） 開館時間：午前9時～午後5時（入館は午後4時半まで）

「高知・再考」というテーマで、寺田寅彦、小砂丘忠義、宮地佐一郎、市原麟一郎といった人々を中心に、高知県へ寄贈いただいた貴重な文学資料をご紹介します。



▲楠瀬大枝他編『土佐國職人絵歌合』

収蔵資料展の紹介をしています！ 詳細は表紙・2・3ページをご覧ください。

2月1日(火)から、常設展が装いを新たにスタートします！

見どころいっぱいの常設展にご期待ください。 詳細は4・5ページをご覧ください。

朗読フェスティバル 2011



▲『アルプスの少女ハイジ』(ハイジ役)や『キテレツ大百科』(コロ助役)ほか多くの作品で視聴者を魅了している声優・杉山佳寿子さん

特別ゲストとして、声優・杉山佳寿子さんが朗読フェスティバルに来てくれます!!

高知県立文学館では、朗読を通して文学に親しんでいただきこうと、「朗読フェスティバル2011」を開催いたします！

今年は13グループのみなさんが一堂に集結！

多彩な作品の数々を思いを込めて朗読します。
朗読を聴いて楽しく文学体験してみませんか？

場所：文学館1階ホール

時間：午前10時～午後4時（予定）

入場：無料

※杉山さんによる講演会も予定しています！※

2011年
2月19日(土)
開催！
入場無料

利用案内

開館時間 午前9時～午後5時（入館は、午後4時半まで）

休館日 年末年始（12月27日～1月1日）を除き、無休。

観覧料 一般350円

特別企画展のあるときは、料金が変わります。
20人以上の団体は2割引。高校生以下、高知県及び高知市長寿手帳所持者及び身障者手帳、療育手帳、障害者手帳、戦傷病者手帳及び被爆者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料です。

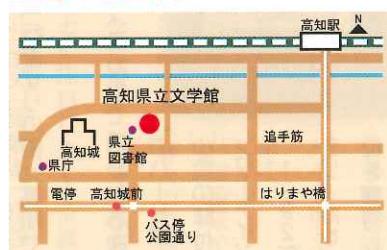
駐車場 なし。ただし近辺に有料駐車場があります。

附帯設備 ホール、ミュージアムショップ、こどものぶんがく室、茶室「慶雲庵」

貸出施設 企画展示室、ホール、茶室

E-mail : bungaku@kochi-bunkazaidan.or.jp
http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~bungaku/

交通のご案内



- 高知龍馬空港より空港連絡バス（朝倉（高知大学前）行）「公園通り」下車 北へ徒歩5分
- JR高知駅下車徒歩20分（または連絡バス・路面電車を利用）
- 土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩5分
- バス停公園通り下車北へ徒歩5分



〒780-0850
高知市丸ノ内1丁目1-20
電話 088-822-0231
FAX 088-871-7857